

レーニンのイギリス労働運動論 (三)

——「政治的自由」の問題——

富 沢 賢 治

- 一 レーニンにおけるイギリス労働運動論の位置
- 二 マルクス、エンゲルスのイギリス労働運動論のレーニンによる継承（以上六三卷三号）
- 三 時期区分
- 四 世紀転換期（以上六三卷五号）
- 五 一九一〇—一四年（本号）

五 一九一〇—一四年

すでに述べたように前世紀末のレーニンはイギリス社会にかんして五つの特殊性をあげている。このうち第三、第四、第五の特殊性の内容とそれらの相互関連については前章で考察したので、第一の特殊性（民主主義の高度の発達）と第二の特殊性（軍国主義の欠如）とにかんす

る諸問題を考察することが、課題として残されている。一九一一年にレーニンは、イギリス社会を規定して、「官僚制の抑圧も軍閥の横行もかつて知らないイギリスのような文化的⁽¹⁾国」という表現を用いているが、この表現からもうかがえるように、レーニンの場合、理論的には、軍国主義の問題は官僚制の問題との関連で、民主主義の問題は文化の問題との関連で、また前の二者と後の二者とは相互に密接な関連をもって、論じられている。それゆえ、これらの問題は理論的には結局一つの問題として究明されねばならない。しかし、われわれの当面の課題は、レーニンのイギリス労働運動論の形成史的考察であるので、本章もまたこの形成史的な考察順序に従わ

なくてはならない。

本章の考察対象である一九一〇—一九一四年という第一次大戦前の数年は、イギリス社会の動揺期であった。当時のイギリス社会は、実質賃金の低下傾向とサンディカリズムの普及とによる労働運動の一部の過激化傾向、大規模なストライキの頻発、三大組合同盟のゼネスト計画、婦人参政権運動家の暴力的示威、アイルランド自治法案をめぐるイギリス本国における地主階級と資本家階級との利害対立の激化とアイルランドにおけるイギリス系住民とアイルランド人との激突、等々の危機的状況に直面していた。このような時代にあつてレーニンは、イギリスにおける「政治的自由」の意味について多くを論じている。そこで本章では、イギリス社会の第一の特殊性としてレーニンが指摘する民主主義の高度の発達という問題との関連をとくに意識しつつ、「政治的自由」の問題にかんして、まず第一に、イギリスにおける「政治的自由」の意味についてのレーニンの見解、第二に、経済的基礎の変化が「政治的自由」におよぼす影響についての彼の見解、そして第三に、「政治的自由」を基盤に活動しているイギリスの社会主義諸政党にたいする彼の性格

づけを、とくにこれらの問題がそれぞれ彼の日和見主義批判とどのように関連しているかという観点から、考察することにしよう(軍国主義の欠如という問題の考察は後の章にゆずる)。

1 「政治的自由」と日和見主義

レーニンは、論集『マルクス主義と解党主義』の結び(一九一四年)において、一方では、どんな資本主義社会でもプロレタリアートは労働者党の形成期に長期にわたりブルジョワジーに思想的・政治的に従属する時代を経ってきた、と述べ、ブルジョワジーにたいするプロレタリアートの従属化現象を資本主義諸国に共通するものとみなしていると同時に、他方では、この従属化現象が各国ごとの歴史的・経済的特殊性に応じて異なった形態をとってきた、と述べ、従属化現象の形態の各国別の特⁽²⁾殊性を強調している。では、この従属化現象の特殊イギリス的な形態をレーニンはどのように把握したのであるうか。

この問題にかんしてレーニンは、「イギリスでは、自由主義的ブルジョワジーは、完全な政治的自由と長期に

わたる、イギリスの独占的地位という事情のもとで、数十年にわたって、自覚した労働者の大多数を墮落させ、思想的に奴隷化することができた³⁾(傍点、富沢)と述べている。そこで、ブルジョワジーにたいするプロレタリアートの従属化現象の特殊イギリスの形態をレーニンにしたがって究明するためには、「完全な政治的自由」という政治的特殊性と「長期にわたるイギリスの独占的地位」という経済的特殊性とが、従属化現象の特殊イギリスの形態とどのように関連するかという問題が検討されねばならないことになる。

従属化現象の特殊イギリスの形態にかんする従来の研究、あるいはより一般的に言って労働貴族論にかんする従来の研究においては、独占という経済的要因が重要視されることは多かつたが、政治的自由という政治的要因についてはほとんどかえりみられることがなかった。しかし、従属化の要因としてレーニンがこの二要因をともに重要視していることは、ここであらためて注目されねばならない。そのさい、さらに注意すべき点は、彼が経済上の国際的優位性と政治的自由というこの二要因をたんにイギリスの個別歴史的事情としてのみ重視して

るのではなく、ある程度、先進資本主義諸国に共通する一般的な事情としてもみとめているということである。たとえば彼は、「アメリカの事情」(一九一二年)で、つぎのように述べている。「イギリスとアメリカでブルジョワ的労働者政治を……有力なものにした主要な歴史的原因は、古くからの政治的自由と、資本主義の内包のおよび外延的發展にとつて、他国にくらべて異常に有利な条件があったことである。これらの条件があったため、労働者階級のなかに、ブルジョワジーに追隨して、自分の階級を裏切った貴族が出てきたのである。」⁴⁾このようにレーニンにあっては、政治的自由と経済的優位性というプロレタリアート従属化の二要因は、たんにイギリスにのみ限定される個別歴史的要因として解されてはおらず、従属化のより一般的な要因として、すなわち、前者は近代的憲法により保証される政治的自由として、後者は資本主義發展にとつての有利な経済的条件として、解されるのである。このように解された場合、従属化のこれら二要因は、たんにイギリス社会にのみ限定されるものではなく、先進資本主義諸国にある程度共通にみられるものとなり、さらにはまた後進資本主義諸国にとつても、

それら諸国が、近代的憲法により政治的自由を確立し、なんらかの事情により経済上の国際的優位性を獲得した場合には、ブルジョワジーにたいするプロレタリアートの従属化現象が、これら二要因により、ひきおこされる可能性が生じうるのである。

このように考えるとき、レーニンの労働貴族論をめぐる諸研究において従来ほとんど無視されてきた従属化の一要因としての政治的自由の問題は、特殊イギリスの問題としてのみならず、資本主義一般の問題としても、検討に値する重要な問題であることが理解できるのである。では、政治的自由はプロレタリアートの従属化とどのように関係するのであろうか。

この問題を究明するためには、まずはじめに、資本主義社会における政治的自由の本質について明らかにしておく必要がある。レーニンは、「ヨーロッパの労働運動における意見の相違」(一九一〇年)のなかで、資本主義社会における政治的自由の問題を、プロレタリアートにたいするブルジョワジーの統治の一方方式の問題として、考察している。そこで彼は、ブルジョワジーの統治方式について、およそ、つぎのように述べている。⁽⁵⁾

すべての国でブルジョワジーは二つの統治方式をつくりあげる。第一の方式は「暴力の方法」であり、第二の方式は「自由主義」の方法、政治的権利を發展させる方向へ、改良、譲歩、等々の方向へ、歩みをすすめる方法」である。資本主義諸国は、その發展過程の特定の時期にどちらか一つの方式を主に適用してきた(たとえば、一八六〇―七〇年代のイギリスは第二の方式をとり、一八七〇―八〇年代のドイツは第一の方式をとった)。しかし、ほぼ一九世紀後半以後の歴史的傾向としては、ヨーロッパ諸国は、暴力の方式から見せかけの譲歩の方式にうつっていった、といえる。では、ブルジョワジーはなぜ暴力方式から「自由主義」方式へと移行したのであろうか。「ブルジョワジーが一方の方法から他方の方法にうつるのは、個々の人物のたぐらみや偶然によるものではなく、彼ら自身の地位が根本的に矛盾にみちているためである。正常な資本主義社会は、代議制度をかためずには、住民がある程度の政治的権利をもたないでは、首尾よく發展することはできないし、この住民は、『文化』の点で比較的高い要求をもっていることを特徴としないわけにはいかない。こういうふうにある最小限の文化性

が要求されるのは、高度の技術、複雑さ、屈伸性、可能性、世界的競争の急速な発展、等々を伴う資本主義的生産様式そのものの諸条件によって生みだされることである。」

このようにレーニンによれば、政治的自由は、本質的にはプロレタリアートにたいするブルジョワジーの一統治方式の結果生じたものであり、この「自由主義」方式という「見せかけの譲歩の方式」をブルジョワジーに強制するものは、資本主義的生産様式そのものに特有な諸条件である。

資本主義社会における政治的自由の本質とその発生基盤がこのようなものであるかぎり、資本主義社会における政治的自由とは本来矛盾にみちた存在でしかありえないということになる。それは、ブルジョワジーにとってもプロレタリアートにとっても、矛盾としてしか存在しない。では、その矛盾はブルジョワジーとプロレタリアートとにとってそれぞれいかなる矛盾として存在するのであるうか。以下、この問題にかんするレーニンの見解を究明することにしよう。

まず第一に、ブルジョワジーにとつての矛盾とはなにか、この問題を検討することから始めよう。レーニンに

よれば、ブルジョワジーは資本主義的生産様式そのものの諸条件に強制されて「自由主義」方式をとらざるをえない。しかしながら、プロレタリアートの統治を真の目的とするはずの「自由主義」方式も、自由主義そのものもつ独自の法則により、プロレタリアートの政治的権利を拡大せざるをえず、プロレタリアートの政治的権利の拡大は、それはまたそれで、ブルジョワジーがよって立つ自らの政治的基盤を掘りくずすことになる。これがブルジョワジーにとつての「政治的自由」の基本的矛盾である。

とすれば、ブルジョワジーは、自らの政治支配体制を維持するために当然のことながら、プロレタリアートの政治的権利の拡大がブルジョワジーの政治的基盤を危くしないような安全弁を自らの機構のうちにくみいれる必要をもつ。ブルジョワジーは、「自由主義」方式を形式的のみ発展させ、プロレタリアートの政治的権利の拡大というその実質面を空洞化させることによって、プロレタリアート統治というその真の目的の実現をはからうとする。プロレタリアートの政治的権利の拡大と実質的空洞化というこのプロセスに、まさに労働貴族が

重要な役割を演ずることになる。労働貴族こそブルジョワジーの政治機構がうまく機能するための安全弁となるのである。ブルジョワジーは、労働貴族をプロレタリアートの形式的代表者として政治に参加せしめることにより、プロレタリアート一般の實質的政治参加を拒否しよう。レーニンは、イギリスでは、「ブルジョワジーが、プロレタリアートの出身者か、プロレタリアートの事業の裏切者を……資本の支配を『たえしのぶ』ように労働者階級を教育する『協力者』として、自分の味方につける方法を、とくに頻繁に、自由に、また広くもちいている⁽⁶⁾」、と述べているが、このさい労働貴族はまさに資本家階級の労働担当副官として機能するのである。われわれは、イギリス社会で「自由主義的労働者政治」が成立する政治的基盤をここにみる事ができる。もちろん、レーニンによれば、「帝国主義的超過利潤」が労働貴族を生みだす経済的基盤となるものであるから、「自由主義的労働者政治」が実現するためには、「政治的自由」という政治的基盤のほかに、「帝国主義的超過利潤」を生みだすところの経済上の国際的優位性という経済的基盤が必要とされることは、言うまでもない。しかしなが

ら、ここでとくに強調したい点は、「政治的自由」がそれ自体として、それが内包する矛盾によって、「自由主義的労働者政治」を生みだす政治的基盤となりうるということである。

つぎに、「自由主義」方式がプロレタリアートにとつていかなる矛盾として存在するかという問題を考察することにしよう。プロレタリアートにとっての「政治的自由」の矛盾は、ブルジョワジーにとつての矛盾と、ちょうど表裏の関係をなしている。すなわち、ブルジョワジーにとつての矛盾の場合と同様に、「政治的自由」の存在は、プロレタリアートの階級闘争にとつてもまた、有利でもあれば不利でもある。では、「政治的自由」の存在はいかなる意味でプロレタリアートの階級闘争にとつて有利であり、かつ不利であるのか。

レーニンは、「政論家の覚え書」(一九一三年)において、労働者による経済的・政治的改良要求をどう評価すべきかという問題を提起しているが、彼によれば、改良要求の評価は、その要求がなされている社会に「政治的自由の一般的基礎」が存するか否かで本質的に異なったものになる。このような観点から彼は、ロシアとイギリ

スとにおける改良要求を対比して、両者が同じ内容の改良要求であっても両者にたいしては異なった評価を下すべきだと主張する。たとえば、団結法という労働者の団結の自由にかんする法律の改良の要求は、政治的自由の一般的基礎を欠くロシアでは、「自由主義的欺瞞」か「ふまじめな、空っぽな、自由主義的空文句」でしかないのであるが、イギリスでは、それを実現する政治的自由の一般的基礎が存在するために、重大な現実的意義をもつことになる。このように、「政治的自由」という基盤のもとでの階級闘争は労働者階級にとって有利に作用する。このような観点からレーニンは、「イギリスやフランスの制度が、プロレタリアの制度よりも、はるかに民主主義的で、労働者階級の闘争にとってはるかに有利なことは……すこしも疑う余地がない」と述べている。⁽⁷⁾

では、「政治的自由の一般的基礎」の存在は、労働者階級の闘争にとっていかなる面で不利に作用するのであるうか。レーニンによれば、ロシアとイギリスとにおける前述のような相違はまた、ロシアでは「ブルジョワ民主主義革命、政治的自由のための革命」が不可欠であることを示すと同時に、「イギリスでは、ブルジョワ民主

主義革命、政治的自由のための革命が不可能である」ことをも示している。⁽⁸⁾このようにして、ブルジョワ民主主義革命が達成されている社会（しかも経済上の国際的優位性が維持されている社会）においては、労働者の一般的要求は、体制変革を目的とする革命ではなく、むしろ体制内における部分的諸改良となる傾向をもつ。そしてこの部分的諸改良の要求が前述の労働貴族によって政治的に代弁されることになる、それらはますますブルジョワジーに都合のよいように変質されていく。このような事態が、プロレタリアートの政治参加が労働貴族の政治参加という形態で実質的に空洞化されるという前述の事態と結びつくとき、ここに「ブルジョワ的労働者政治」あるいは「自由主義的労働者政治」が発生することになる。⁽⁹⁾これが、プロレタリアートにとっての「政治的自由」の矛盾である。だからレーニンは、「政治的自由の一般的基礎」のうえでの改良闘争が労働者階級の闘争にとって有利であることを指摘すると同時に、この改良闘争が、もしもそれが「労働運動の革命的方法」と結合しないならば、「革命的社会主義の成功にとってもっとも重大な脅威」に転化することを強調するのである。⁽¹⁰⁾

レーニンは、民主主義の高度の発達というイギリス社会の特殊性の内容を、日和見主義発生の要因との関連で、上述のような矛盾を内包するものとして把握したのである。

2 世界市場における独占的地位の衰退と労働運動の

高揚

われわれは前項でイギリスにおける「政治的自由」が日和見主義発生といかに関連するかという問題を考察した。そのさいわれわれは両者を関連づける媒介環として労働貴族が重要な役割を果たすことを指摘した。

ところで、日和見主義発生の二要因としての「政治的自由」と経済的優位性とはいかなる関連を有しているのであろうか。レーニンの論文のなかからこれら二要因の関連を明示した箇所を見いだすことは困難である。たとえば「ハリー・クウェルチ」(一九一三年)のなかでは、彼はつぎのような説明をしている。「資本主義と政治的自由のもっともすすんだ国で、イギリス・ブルジョワジ(彼らはすでに一七世紀に、かなり民主主義的な方法で、無制限な君主制に制裁をくわえていた)は、一九世

紀に、イギリスの労働運動を分裂させることに成功した。

一九世紀の半ばに、イギリスは世界市場でほとんど完全な独占を享受していた。独占のおかげで、イギリス資本の利潤は信じられないほど大きかった。だからこの利潤のうちのほんのきれはしが、労働貴族、熟練工場労働者にわけあたえられることが可能であった。\\ 当時かなりの賃金をえていたこの労働貴族は、狭い、利己的なギルド的組合にとじこもり、プロレタリアートの大衆から分離し、政治のうえでは自由主義的ブルジョワジーのがわに立っていた。そして、これまでのところ、イギリスほど、先進的労働者のあいだに多数の自由主義者がいるところは、おそらく世界のどこにもないであろう。」⁽¹¹⁾ 他の論文においてもそうであるが、この一節においても、政治的自由と経済的優位性との関連はかならずしも明確ではない。しかしここでも、「自由主義的労働者政治」を実現させるために労働貴族が重要な役割を演じていること、およびその経済的基盤として世界市場独占という経済的優位性があることが示されている。ここに明らかのように、またこれまでもしばしば述べてきたように、レーニンによれば、労働貴族発生の経済的基盤は、経済上

の国際的優位性にもとづいて獲得された「超過利潤」にあるのであるから、日和見主義発生を可能にする第一要因としては経済的優位性が前提されているということになる。すなわち、「政治的自由」が内包する矛盾に強制されてブルジョワジーがどれほど労働貴族を必要としようと、「帝国主義的超過利潤」を欠いては、労働貴族システムは十全には機能しえない。このような意味において、レーニンの場合、経済的優位性がとくに重要視されているのである。

「自由主義的労働者政治」の経済的基盤がイギリスの独占的地位に求められるとするならば、イギリスの独占的地位の衰退は当然「自由主義的労働者政治」にとってその最重要の基盤が失われたことを意味することになる。レーニンは、世界市場におけるイギリスの独占的地位の衰退とイギリス国内における社会主義の再生とのあいだに密接な関連があることをとくに強調して、「ハリー・クウェルチ」のうちの上記の引用文にひきつづいて、つぎのように述べている。「一九世紀の最後の四分の一期に、事態は変りはじめた。イギリスの独占は、アメリカ、ドイツその他によって掘りくずされた。イギリスの労働

者のあいだの狭い、素町人的労働組合主義と自由主義との経済的基礎は破壊された。社会主義は、イギリスで、ふたたび頭をもたげ、大衆のなかに滲透し、イギリスの社会主義政党周辺のインテリゲンツィアの手のつけられない日和見主義を押しきって、おさえることのできない勢いで成長しつつある。⁽¹²⁾このようにイギリスの独占的地位の衰退が労働組合主義と自由主義との経済的基礎の破壊を意味し、日和見主義に対抗する社会主義の台頭を意味するとするならば、それはまたブルジョワジーのプロレタリアート統治の方法としての「自由主義」方式にもなんらかの変化をもたらさずにはおかないことになる。われわれは、経済的優位性の衰退によるこの「政治的自由」のブルジョワ的機構の変化をレーニンがどのように把握したかを、以下において考察することにしよう。

経済的優位性の衰退の社会的反映は、とくに第一次大戦前のイギリス社会に顕著に見られた。一九一二年にレーニンは、「イギリスで」において、イギリスでは自由主義派が六年半も政権を担当しているにもかかわらず、ブルジョワ的自由主義の枠内にとどめえない労働者階級独自の運動が強力に発展しつつあると評価し、さらに、

これに対抗する自由主義派が、自己の立脚する地盤を失いつつあるために、「土地改革」というスローガンをとりあげることによって農村労働者をもふくめた有権者大衆の支持を維持しようと努力している、という実列をあげ、大戦前夜のイギリス社会における自由主義派の動搖を指摘している。⁽¹³⁾

「土地改革」問題にもまして、大戦前夜の自由主義派の動搖を明示したのはアイルランド問題であった。レーニンは、一九一三年から翌年にかけて、アイルランド問題を考察したいくつかの論文を書き、アイルランド問題をめぐる労働運動の高揚、それに直面した地主階級とブルジョワ階級との動搖、支配階級としてのブルジョワ階級と地主階級との利害対立の激化、地主階級にたいするブルジョワ階級の譲歩、イギリス民主主義の本質の暴露などの問題を論じている。

レーニンは、一九一三年に、アイルランドにおける労働運動の高揚とダブリンにおける官憲の労働者弾圧事件にふれて、「ダブリンにおける階級闘争」を書き、そこで、とくにアイルランドにおける労働運動の高揚とイギリス本国の労働者との連帯の強化という事実を高く評価

し、つぎのように述べている。

アイルランドで不熟練労働者が組織されはじめ、それが労働組合に活気をもたらし、さらに、民族主義的偏見にとらわれない、自主的な、革命的な労働運動がきたえられはじめた。こうして、二重三重の民族的抑圧におしつぶされてきたアイルランドは、いまや「プロレタリアートの組織された軍隊の国」にかわりつつある。アイルランドにおけるこのような労働運動の進展はイギリス本国の労働者大衆にも共感をもってむかえられ、長年にわたる両者の民族主義的偏見が克服されはじめた。労働者大衆は、日和見主義的な労働組合運動家と民族主義者にたいして抵抗しはじめている。「イギリスの労働者大衆は、徐々に、しかし確実に、新しい道へ——労働貴族の小さな特権を擁護することから、新しい社会制度をうちたてるための大衆自身の偉大な英雄的闘争へ、うつりつつあるのである。」⁽¹⁴⁾

「ダブリンにおける階級闘争」の直後に書かれた「ダブリンの激戦から一週間たって」においても、レーニンは、アイルランドとイギリス本国の労働者の連帯の事実を強調しているが、それと同時に、両国の労働者が政治

的改良の要求を正しく提起している点を高く評価していることは、前項で考察した「政治的自由」の問題と関連して、とくに注意されるべきである。すなわち、ダブリンにおける労働者弾圧に抗議するために事件の直後にダブリンとロンドンでただちに抗議集会が開かれ、双方の集会で「団結の自由」という「政治的改良のスローガン」が提起されたが、これにかんしてレーニンは、つぎのように述べている。「イギリスには政治的自由の基礎があり、立憲制度がある。労働者の団結の自由という要求は、この国では、必要欠くべからざるものであり、現在の立憲的秩序のもとで十分に達成できる改良の一つである。……イギリスの労働者は、彼らに必要な政治的改良を実現する道と、イギリス憲法の条件のもとでこの改良が完全に可能なことをみごとに意識して、この政治的改良のスローガンをまったく正しく提起している。⁽¹⁵⁾」レーニンは、アイルランドとイギリス本国の労働者の連帯の強化という事実に加えて、両者が政治的改良の要求を正しく提起している点においても、両国の労働者階級の成長をみたのである。

彼は、このように両国の労働者階級の成長を一方にお

いて見すえつつ、他方においては、これに対応するイギリス支配階級の分裂と動揺の事実をも指摘している。第一次大戦前におけるイギリス支配階級の分裂と動揺はアイルランド問題において一つの頂点に達するが、一九一四年の大戦前夜にレーニンは、アイルランド問題にかんして、「空想家カール・マルクスと実践的なローザルクセンブルグ」(「民族自決権について」、二―三月執筆、第八章)、「イギリスの自由主義者とアイルランド」(三月執筆)、「イギリスにおける立憲制の危機」(四月執筆)などの論文を書いている。

「空想家カール・マルクスと実践的なローザルクセンブルグ」において、レーニンは、イギリス本国からのアイルランドの独立の重要性を強調したマルクスとエンゲルスの主張が国際労働運動の見地からみて理論的・実践的に正しい政策であったことを論証し、レーニン自身がこの政策をうけついでいることを明らかにしている。この論文が、アイルランド問題にかんするマルクス、エンゲルスとレーニンとの理論的継承関係を明らかにするうえで重要な論文であるとすれば、他の二論文で注目すべき点は、帝国主義段階におけるアイルランド問題を

めぐるイギリスの三階級のそれぞれ異なった態度にかんするレーニンの現状分析である。マルクス、エンゲルスとレーニンとの継承関係にかんする基本的問題点についてはすでに本論文の第二章で考察したので、以下本章ではレーニンの現状分析を中心に考察をすすめることにしよう。

レーニンによれば、アイルランドの改革時代は一八六八年のグラッドストーン内閣以来はじまったのであるが、「イギリスの労働者が、自由のためにたたかっている諸民族と諸階級の先頭に立たないで、金持の軽蔑すべき下僕であるイギリスの日和見主義者の紳士たちに追隨していた」ために、結局は、日和見主義者たちがアイルランドの解放を半世紀もひきのばすのを許すことになってしまった。⁽¹⁷⁾だが、アイルランド人民の闘争の革命的爆発という状況のもとで、アスキスの自由党は一九一二年三度アイルランド自治法案を提出した。この法案は前二回の法案と大差なく、アイルランドにたいしてイギリス帝国内における自治領の地位を認める程度のものであったが、この法案にたいして保守党とアルスタ統一党が猛烈に反対した。⁽¹⁸⁾法案は下院を通過したが、上院は二度までもこ

れを否決した。アルスタ統一党は法案の通過を阻止するためにアルスタ義勇軍を編成し、自治法案が通過してもあくまでも抵抗することを宣言した。アルスタの人口の五七パーセントを占めるプロテスタントたちは、アイルランド自治法が彼らをアイルランド南部のカトリックという異教徒と異民族の従属下にひきわたすことになるという理由で、自治法に反対し、蜂起をおこすといつて脅かした。これに対抗して南部では一九一三年に国民義勇軍が結成された。一九一四年三月、自治法案は下院を三度通過した。自由党政府は、アイルランドの自治の適用区域からアルスタを六年間除外するという譲歩によって、アルスタ問題の解決を図ろうとした。しかしアルスタはこのためかえって不穏となったので、自由党政府は、ダブリン近郊にあった駐屯軍にアルスタ進駐を命じた。だが命令をうけた駐屯軍首脳部は、アルスタのプロテスタントとたたかうことは自分たちの「愛国心」に反するという理由で、辞表を提出する、と声明した。「自由党政府は、軍隊の先頭に立った地主たちのこの反乱にすっかり仰天してしまった。」⁽¹⁹⁾結局、政府が彼らに譲歩し、軍隊をアルスタにたいして用いないことにした。こうして

憲法をやぶった地主たちにたいして自由党は讓歩してしまつたのである。

この事件をレーニン⁽²⁰⁾は、イギリス労働運動の発展という見地からとくに重要視し、この事件の意義にかんして、つぎのような評価を与えている。『全能の』(自由主義的ばかりども、とくに自由主義的学者たちは百万べんもそう考え、そう語ってきた)イギリス議会在たいする地主のこの反乱の意義は、異常に大きい。一九一四年三月二十一日……は、イギリスの高貴な地主貴族がイギリスの憲法とイギリスの法秩序をこっぴみじん⁽²⁰⁾に打ちくだいて階級闘争のすばらしい教訓をあたえた、世界的な転換の日となるであろう。この教訓とはなにか。レーニンによれば、それは、「イギリスの法秩序や憲法と呼ばれるあの紙きれにたいする俗物的信仰」を、地主階級が全人民の目のまえで打ちくだいてみせたことである。この場合、地主階級は、いわば「右からの革命家」としてふるまい、そうすることによって、階級闘争という現実を人民が見るのを妨げていたすべてのものをとりさつたのである。いまやイギリス人民は、ブルジョワジーと自由主義者が偽善的におおいかくしていた現実を見たので

あり、そして、改良だとか議会の力だとかいう議論で労働者階級をねむりこませている小ブルジョワ的自由主義者が実は人民を愚弄するためにあやつられている替玉であることがわかつたのである。これがこの事件の教訓である。レーニンによれば、この教訓は、イギリスのプロレタリアートとブルジョワジーとの矛盾の鋭さが、自由主義派の中途半端で偽善的なえせ改良政策によつてはけつしてにぶらせられることがないということの帰結である。⁽²¹⁾

レーニンが、この事件をもつて、イギリス・プロレタリアートの階級的覚醒の一契機とみなしていることは、「イギリスにおける立憲制の危機」における彼のつぎの結語において明らかである。「ほんとうは、イギリスの『法秩序や社会的平和』というのは、ほぼ一八五〇年代から一九〇〇年代までの、イギリス・プロレタリアートの休眠の短期間の結果にすぎなかつたのである。イギリスの独占はおわつた。世界的な競争がはげしくなつた。物価騰貴がやつてきた。大資本家の連合体は中・小経営者をおしつぶし、のしかかるように労働者におそいかかつた、一八世紀末の時代以来、一八三〇—四〇年代のチ

チャーティズム以来、イギリスのプロレタリアートはふたたび目ざめた。一九一四年の立憲制の危機は、この覚醒の歴史上の重要な諸段階の一つをなすであらう。⁽²³⁾

マルクスは、一八七八年二月十一日づけのリーブクネヒトあての手紙で、「一八四八年からはじまった腐敗時代のほかで、イギリス労働者階級は底しれぬ墮落にしないでまきこまれ、ついに『大自由党』すなわち彼ら自身の抑圧者である資本家の党のたんなる付属物になりさ⁽²⁴⁾がった。イギリス労働者階級の指導は、買取のきく労働組合幹部や職業的アジテーターの手にすっかりうつってしまった⁽²⁵⁾」、と述べ、一八四八年以降を「腐敗時代」と規定している。エンゲルスもまた、「世界市場支配への参加がイギリス労働者の政治的無力の経済的基礎であったし、またいまでもそうである。この独占の経済的搾取のさいにブルジョワのしっぽとなり、しかもその利益にあずかっているから、彼らが政治上では『大自由党』のしっぽであるのは自然の理である⁽²⁶⁾」(一八八三年八月三〇日づけベーベルへの手紙)と述べ、一八四〇年代におけるチャーティスト運動の崩壊以降の時期をイギリス・プロレタリアートの「冬眠」の時期と規定している。エ

ンゲルスは、さらに、イギリスの世界市場支配が「冬眠」の根本原因であるのだから、「真に全般的な労働運動が当地におこるのは、イギリスの世界独占がやぶれたことが、労働者に感得されるようになるときだけである⁽²⁷⁾」と断言している。⁽²⁸⁾

マルクス、エンゲルスと同様に、一八四〇年代のチャーティズム運動崩壊以降の時期を「イギリス・プロレタリアートの休眠」の時期とみなすレーニンは、エンゲルスとともに、その「冬眠」あるいは「休眠」の根本原因をイギリスの世界市場支配にあるとみなす。それゆえレーニンは、前述のように、イギリスにおける労働運動の高揚を世界市場支配体制の衰退と密接に関連づけ、一四一年の立憲制の危機をその衰退の支配階級における反映とみなし、アイルランド問題にかんする一事件をイギリス・プロレタリアートの覚醒の歴史上の重要な諸段階の一つをなすものと規定したのであった。

3 社会主義諸政党

世界市場におけるイギリスの独占的地位の衰退にもとづくイギリス労働運動の高揚と社会主義勢力の再生とい

う現象は、労働者諸政党にたいしても影響をおよぼさずにはおかない。労働者諸政党は、大戦前夜の変動期における労働運動の高揚をどのように組織化し、この革命的な勢力を動揺する支配階級にたいしてどのように統一化しようとしたのであろうか。本項では、大戦前夜の変動期にあるイギリスの労働者諸政党をレーニンがどう評価したかという問題を考察することにしよう。

A 党と大衆との断絶。イギリス労働者政党一般にたいするレーニンの評価で特徴的な点は、党のセクト的性質とプロレタリアート大衆の労働運動との対比、および党内における日和見主義的幹部と革命的な大衆黨員との対比が、つねに強調されているという点である。たとえば、「一九一二年のイギリスの労働運動」(一九一三年)において、レーニンは、一九一二年のイギリス労働運動を総括して、もっとも顕著な出来事として炭鉱夫のストライキをあげ、それが最低賃金法という政府の譲歩をかちとったことに注目し、このストライキが画期的なものであり、イギリスにおける社会的諸勢力の相互関係に変動をひきおこした点を高く評価しているのにたいして、労働者諸政党にたいしては、「党の事業についてはイギリス

の進歩はたいしたものではない」と、きびしい評価をくだしている⁽²⁷⁾。彼によれば、労働者の一部に当時かなり強くみられたサンディカリズムの風潮も、労働者諸政党とプロレタリアート大衆との断絶に起因するものであった⁽²⁸⁾。レーニンはこのようにイギリス労働者諸政党を一般にプロレタリアート大衆の労働運動と密着していないセクト的な存在と規定する。では彼は、これらの政党のそれぞれにたいしてどのような評価をくだしているのであるうか。以下、独立労働党、労働党および社会党にたいする彼の評価を考察しよう。

B 独立労働党。レーニンは、イギリスの労働者諸政党を、「自由主義的労働者政治の党」の系列と「社会民主主義者の党」の系列という二つの系列に大別し、独立労働党を前者の代表例、イギリス社会党を後者の代表例とみなしている。日和見主義的潮流と社会民主主義的潮流とへのイギリス労働運動の分裂の歴史的起源についてはすでに考察したが、「自由主義的労働者政治の党」と「社会民主主義者の党」とへの労働者政党の分裂は、政党段階でのこの分裂の反映としておさえられている。この問題にかんして彼は、「自由主義的労働者政治にかん

するイギリスの論争」(一九一二年)において、つぎのように述べている。

イギリスにはイギリス社会党と独立労働党という二つの労働者政党があるが、イギリス労働者の社会主義運動のこの分裂は、偶然に生みだされたものではなく、「それは、イギリスの歴史の特殊性によって生みだされたものである。イギリスでは、どこよりもさきに資本主義が発展し、イギリスは長いあいだ全世界の『工場』であった。この排他的な、独占的な地位によって、イギリスでは、比較的悪くない生活条件が、労働貴族すなわち少数の熟練高給労働者に、つくられた。ここから、この労働貴族のうちに素町人的な、ギルド的な精神が生まれた。この労働貴族は、自分の階級から分離し、自由主義者のほうへ心をひかれ、社会主義を『ユートピア』⁽²⁹⁾だとしてこれに嘲笑的な態度をとった。」

レーニンは、イギリスのこのような歴史的特殊性が日見主義の潮流を生み、またその政党としての具現物である独立労働党を生みだした、と主張する。だから彼は、『独立労働党』は自由主義的労働者政治の党である。

この党はただ社会主義から『独立』なのであって、自由

主義には非常に従属している、と言われるのは、正当である⁽³⁰⁾と述べ、その他の箇所でも独立労働党に言及するときは、ほとんどつねに「社会主義から独立で、自由主義に従属している党」という意味の注釈をつけくわえるのである⁽³¹⁾。

ここで端的に述べられているように、独立労働党の歴史の起源は、イギリス資本主義の早期発展↓世界市場における独占的地位↓超過利潤の獲得↓熟練高給労働者の労働貴族化↓労働貴族の自由主義的精神↓自由主義的労働者政治↓独立労働党という順序で説明され、そしてこれがまた独立労働党の本質をも示すことになっている。

では、このような歴史の起源と本質をもつ独立労働党の現状を大戦前夜のレーニンはどのように把握したのであろうか。すでに述べたように、世市場におけるイギリスの独占的地位の衰退は自由主義的労働者政治の基盤の崩壊を意味する。とすれば、それは、独立労働党における変化をも意味し、そしてまたひいては、イギリスにおいてはじめて労働運動の統一化の現実的基盤が成立しはじめたことをも意味する。自由主義的労働者政治の思想がイギリスの労働者のかなりの部分に影響をおよぼし

ているあいだは、労働運動の分裂を除去し、統一を実現することは問題にもなりえなかつた。レーニンによれば、「自由主義労働者政治にたいする社会民主党の闘争がまだかたづかないあいだは、空文句や希望によって統一をつくりだすことはできない」⁽³²⁾のである。だが一九一二年のレーニンは、「い、ま、や、この統一は現実に可能になりはじめている」と断言する。なぜか。「最近、イギリスの独占は最終的に掘りくずされた。……階級闘争が大規模に激化しつつあり、この激化とともに、日和見主義の基盤が掘りくずされ、自由主義的労働者政治の思想が労働者階級のうちにひろまるかつての基礎が掘りくずされつつある」からである。そのなによりもの証拠としてレーニンは、『独立労働党』そのものなかに、自由主義的労働者政治にたいする抗議が成長しつつある」という事実を指摘している。⁽³³⁾

このようにしてレーニンは、イギリスの独占衰退による日和見主義の基盤の弱化和その反映としての独立労働党の内部矛盾のうちに、労働運動の統一を予見し、近い将来におけるその中核としてのイギリス共産党の結成を期待したのである。

C 労働党。つぎに、自由主義的労働者政治をもっぱら議会内で担当することをその任務としている労働党にたいするレーニンの見解を考察することにしよう。レーニンによれば、労働党は、独立労働党とも社会党とも区別されるべき特殊な労働者組織である。議会内の労働党は、独立労働党所属議員のほかに労働組合から選出された議員からも成っているが、そのような構成をもつ労働党は、『社会主義政党と非社会主義的労働組合との妥協』⁽³⁴⁾の産物であり、社会党と独立労働党とに比較すれば、「もっとも日和見主義的な、また自由主義的労働者政治の精神のしみこんだ労働者組織」⁽³⁵⁾である。

このような特殊な労働者組織は他国に類例をみないものであり、この点にかんして、レーニンは、「イギリスの日和見主義者は、他国の日和見主義者がしばしば心をひかれている事がらを実現した。すなわち、日和見主義的な『社会主義的』議員と、自称無党派の労働組合の議員とを結合することである。……悪名高い『広範な労働者党』⁽³⁶⁾が、イギリスで、しかもイギリスでだけ、実現されている」と述べている。

では、このような特殊な労働者組織がなぜイギリスで

だけ発生したのであるうか。レーニンによれば、独立労働党の歴史的起源の場合と同様に、「イギリス労働党の日和見主義は、イギリスにおける一九世紀後半の、すなわち『労働貴族』が、イギリス資本の特別高い利潤の分配にある程度あなかった時代の、特殊な歴史的諸条件によって説明される⁽³⁷⁾」のであり、さらに、「社会主義政党和非社会主義的労働組合との妥協」の歴史的起源にかんじて述べれば、それは、「イギリスの歴史の特殊性、すなわち労働者階級の貴族が別にかたまって非社会主義的・自由主義的な労働組合を形成したことによって生みだされた⁽³⁸⁾」ものなのである。

労働党の歴史的起源とその本質とにかんする上述の議論からすれば、独立労働党の現状分析においてなされたのと同じ結論が、労働党の現状分析からも導出されることになる。すなわち、一九一三年のレーニンは、労働貴族を生みだした一九世紀後半のイギリスの特殊な歴史的諸条件はもはや過去のものになりつつある、と認識している⁽³⁹⁾。一九一三年のイギリス労働党大会の討論を検討したレーニンは、労働党の基盤をなす日和見主義的な労働組合が社会主義に転換しはじめたことによって、労働党内に多くの中間的な、混乱した状態がつくりだされていることを指摘している⁽⁴⁰⁾。彼はまた、同年の議会での海軍省予算審議における労働党議員のはっきりしない態度（一部の議員は政府に賛成投票し、海軍省予算の削減に反対した）にかんじて、『独立労働党』——すなわちイギリスの社会主義的日和見主義者——さえ、『労働党』は泥沼にはまりこんだ⁽⁴¹⁾と見ている」という事実を指摘し、日和見主義者間のこのような分裂のうちに「日和見主義の悲しむべき結果」をみると同時に、そこに日和見主義の基盤が掘りくずされつつある事例をみたのである。

D イギリス社会党。レーニンは、イギリスにおける社会民主主義者の組織の歴史を概括して、「イギリス社会民主主義者の組織は、『社会民主主義連盟』という名で一八八四年に創立された。一九〇九年以後、それは『社会民主党』と呼ばれるようになり、また一九一一年に個別に存在したいくつかの社会主義者グループがこれに合流してから、『イギリス社会党』と呼ばれるようになった⁽⁴²⁾」と述べているが、ここに明らかなように、レーニンは、独立労働党を「自由主義的労働者政治の党」と規定するのにならして、イギリス社会党を「社会民主

義者の党」と規定している。

社会党の現状を評価するさいに特徴的な点は、彼が、独立労働党の評価の場合と同じように、社会党を評価する場合にも、党内における日和見主義的幹部と革命的一般黨員とのあいだの闘争を重要視していることである。

たとえば、「イギリス社会民主大会」(一九一一年)において、レーニンは、イギリス社会民主党の一九一一年の大会で、党の指導者のハインドマンが政府の軍備政策を擁護し、党の中央委員全員が彼を支持したのたいていして、各地方グループの幾多の決議が彼に反対したという事実にとくに注目し、一方では「イギリス労働運動における日和見主義の支配」の強さを指摘すると同時に、他方では、日和見主義的幹部とたたかう革命的一般黨員の活動のうちに「プロレタリア闘争の精神」がみられることを指摘している。⁽⁴³⁾

イギリスの軍備問題をめぐる日和見主義的幹部と革命的一般黨員とのあいだの闘争は、大戦前年の一九一三年のイギリス社会党大会で頂点に達した。ハインドマンは、強大な艦隊の保有要求を社会主義者は支持すべきだ、と主張した。彼を先頭とする党の旧指導部とこれに反対す

る多数代議員とのあいだの執拗な闘争の結果、この大会でハインドマンは指導部を去らねばならなくなり、指導部そのものも八名中(クウェルチとアトヴィングを除いて)六名が入れかわることになった。⁽⁴⁴⁾レーニンは、この結果を「イギリスの社会主義にとって大きなプラスとみなすべきだ」と評価した。

彼は、一般的には、イギリス社会党を高く評価し、「なるほど、イギリスの社会民主主義者は、大衆から切りはなされていたために、ときには、いくらセクト的な性格をおびはした。イギリスの社会民主党の首領であり、創立者であったハインドマンは、排外主義に転落させた。しかし、社会民主党は彼に反撃をくわえた。そして、全イギリスでただイギリス社会民主党員だけが、何十年にわたって、マルクス主義の精神で系統的な宣伝煽動をおこなってきたのである」⁽⁴⁵⁾と述べている。だが、イギリス社会党は、その党内矛盾を克服しきれず、やがては分裂せざるをえなくなる。大戦開始直後にレーニンは、イギリス労働運動の新しい特徴として、第一に、イギリス社会党内のハインドマン・グループが社会排外主義に転落したことによって、日和見主義が社会排外主義

に転形したと、第二に、ハインドマン・グループを批判する革命的社会民主主義者たちがイギリス社会党の隊列を脱した事実とを、あげている。⁽⁴⁷⁾

この二つの問題点、すなわち、日和見主義の社会排外主義への転形の問題と革命的社会民主主義者による共産党結成の問題とを考察することは、次章以下の課題となる。

- (1) 「スローガンと国会内外における社会民主主義的活動の在り方とについて」全・XXVII・三四八ページ。
- (2) 全・XX・二八二ページ、参照。
- (3) 同上ページ。
- (4) 全・XXXVI・二三三ページ。
- (5) 全・XXVI・三六七—三八ページ、参照。
- (6) レーニン「古いが、しかし永久に新しい真理について」(一九一三年)、全・XXVII・二二二ページ。
- (7) 同上ページ。
- (8) 「政論家の覚え書」全・XXIX・四一〇—一ページ、参照。
- (9) 「ブルジョワ的労働者政治」あるいは「自由主義的労働者政治」という概念がもつこの奇妙な形容矛盾にふれてレーニンは、こう書いている。「それがどんなに奇妙に思われようとも、もし労働者階級が自分の解放の目的をわす

れ、賃金奴隷制と和解して、自分の奴隷状態のみせかけの『改善』を得るために、あるときはあるブルジョワ政党と、あるときは他のブルジョワ政党と同盟をむすぶことに腐心するにとどまるならば、資本主義社会では、ブルジョワ政治は労働者階級によってもなされうるのである。」「(「アメリカの事情」全・XXXVI・二三三ページ)

- (10) レーニンはつぎのように述べている。「われわれは、労働者階級が彼らの状態を、たとえほんのわずかであっても、現実改善(経済上および政治上)するのを、援助することにとめてゐる。われわれは、どんな改良も、それが大衆の革命的闘争方法によって支持されなければ、強固で、真実で、重大なものとはなりえないと、つねに付言している。われわれは、改良のためのこの闘争を労働運動の革命的方法と結合しない社会主義政党は、セクトに転化する恐れがあり、大衆から切りはなされる恐れがあること、そしてそれは、真の革命的社會主義の成功にとつてもっとも重大な脅威であることを、つねにおしえてゐる。」「(『社会主義宣伝連盟』の書記へ)全・XXXIX・四三八—三九九ページ(なお、この文章は一九一五年に書かれたものであるが、行論の必要上、本項で用いることにした)。
- (11) 全・XXIX・三九二ページ。
- (12) 同上ページ。
- (13) 全・XXIV・二八一ページ、参照。
- (14) 全・XXIX・三五四ページ。

- (15) 全・XX・三六九ページ。前項ですでに考察したように、レーニンによれば、この同じ政治的改良のスローガンも政治的自由の基礎を欠く国では自由主義的空文句にすぎなくなる。彼は、この問題にかんして、つぎのように述べている。「ロシアには、まさに政治的自由という一般的基礎がないが、これがなければ、団結の自由という要求はまったくこっけいであり、わが国で改良主義の道が可能であるという思想で人民をあざむく、流行の自由主義的空文句にすぎなくなる。ロシアでは、自由主義者の無力な、いつわりの改良主義を、改良主義の幻想におかされていない労働者の徹底的な民主主義に対置しなければ、労働者にとっても全人民にとってももともと緊切に必要な、団結の自由のためにたたかうことはできない。」(同上ページ)
- (16) その内容については、富沢賢治「マルクスと植民地主義——植民地主義の歴史的役割——」、『思想』、一九六八年八月号、六五—七ページ、参照。
- (17) 「イギリスの自由主義者とアイルランド」、全・XX・一五一—三ページ、参照。
- (18) この時代のアルスタ問題については、別枝達夫「アイルランド」(大野真弓編『イギリス史・改訂新版』、山川出版社、一九六五年、所収)四七四—六ページ、参照。
- (19) レーニン「イギリスにおける立憲制の危機」、全・XX・二三四ページ。
- (20) 同上、二三五—六ページ。
- (21) 同上、二三六ページ、参照。
- (22) 同上、二三六—七ページ。
- (23) 『マルクス・エンゲルス選集』大月書店版、第七巻、三九—四一ページ。
- (24) 同上、第一七巻、一八〇ページ。
- (25) 同上ページ。
- (26) この問題にかんするエンゲルスの見解についての詳論は、富沢賢治「エンゲルスの一九世紀末イギリス労働運動論」、『一橋論叢』六一巻一号、参照。
- (27) 全・XXVII・四九六ページ。
- (28) 同上ページ、参照。
- (29) 全・XXVIII・三八六ページ。
- (30) 同上ページ。
- (31) レーニンは、独立労働党の自由主義への従属を示す一例として、選挙における独立労働党員と自由主義者とのプロクツゴくりについて、つぎのように述べている。「最近イギリスのレスター市で、議会の補欠選挙がおこなわれた。……レスター選挙区からは、二名の議員が議会へおくられるが、有権者はそれぞれ二票をもっている。……こうした選挙区でこそ、社会主義者と自由主義者との暗黙のプロクツ(同盟)がとくにつくられやすい。……まさにこうした選挙区から、いわゆる『独立』(社会主義からの独立)であって、自由主義からの独立ではない)労働党のもっとも著名な指導者たちが議会に出たのである。……さて、こうした

- 選挙区では、支配的な自由主義者は、一票は社会主義者へ、一票は自由主義者へ、という指令……を自派の有権者にあたえる。……したがって、事実上、自由主義者と穏健な日和見主義的社会主義者とのブロックができています。事実上、イギリスの『独立党員』……は、自由主義者に従属している。イギリス議会での『独立党員』の行動は、たえずこの従属を裏書きしている。」「イギリスの日和見主義者の暴露・一九一三年・全・XX・二八〇—一ページ)
- (32) 「自由主義的労働者政治にかんするイギリスの論争」、全・XVII・三八七ページ。
- (33) 同上、三八六—七ページ、参照。
- (34) 「イギリス労働党大会」(一九一三年)、全・XVIII・五八七ページ。
- (35) 「イギリスで(日和見主義の悲しむべき結果)」(一九一三年)、全・XIX・三五—三六ページ。
- (36) 「自由主義的労働者政治にかんするイギリスの論争」、全・XVIII・三八七ページ。
- (37) 「イギリスで(日和見主義の悲しむべき結果)」、全・XIX・三五—三六ページ。
- (38) 「イギリス労働党大会」(一九一三年)、全・XVIII・五八七ページ。
- (39) 「イギリスで(日和見主義の悲しむべき結果)」、全・XIX・三五—三六ページ。
- (40) 「イギリス労働党大会」、全・XVIII・五八七ページ。
- (41) 「イギリスで(日和見主義の悲しむべき結果)」、全・XIX・三五—三六ページ。
- (42) 「ハリー・クウェルチ」(一九一三年)、全・XIX・三九—四〇ページ。
- (43) 「イギリス社会民主党大会」(一九一一年)、全・XVII・一七七—七八ページ。
- (44) レーニンのハインドマン評価とクウェルチ評価とは、それぞれ「ハインドマンのマルクス論」(一九一一年)と「ハリー・クウェルチ」(一九一三年)とにおいてみることが出来る。
- レーニンのハインドマン評価の核心は、レーニンがハインドマンの自伝『冒険にみちた生涯の記録』(一九一一年)にかんして書いたつぎの文章にみられる。「ハインドマンの自伝はイギリスのブルジョワ的俗物の伝記であり、その俗物は、彼の階級の最良の人間であって、結局は社会主義への自分の進路をきりひらきはするが、ブルジョワ的伝統、ブルジョワ的な見解と偏見から完全に脱却することは決してないのである。」「ハインドマンのマルクス論」、全・XVII・三一九—二〇〇ページ)
- このようなハインドマン評価にたいしてレーニンはクウェルチをイギリスにおける社会民主主義者の一典型としてつぎのように評価する。「クウェルチは、イギリスの労働運動における日和見主義と自由主義的労働者政治に反対して、毅然として、確信をもってたたかった人々の第一線に

あった。……全イギリスでただイギリス社会民主党員だけが、何十年にわたってマルクス主義の精神で系統的な宣伝煽動をおこなってきた。これは、クウェルチと彼の同志たちのもっとも偉大な歴史的功績である。マルクス主義者クウェルチの活動の成果は、近い将来のイギリス労働運動に、完全な力で現われるだろう。」〔ハリー・クウェルチ、全・XIX・三九三ページ〕

(45) 『イギリス社会党』の大会」(一九一三年)、全・XIX・八二ページ。

(46) 「ハリー・クウェルチ」、全・XXI・三九三ページ。

(47) 「社会主義インタナショナルの現状と任務」(一九一四年)、全・XXI・二三ページ、参照。

(一橋大学講師)